

危機から10年、教訓を 風化させてはならない

理事長 門脇 英晴

今年はアジア通貨・金融危機から10年の節目の年であり、危機を回顧し、再発防止の枠組みや東アジア共同体成立への展望等多くの議論がなされた。

現在の東アジア諸国の経済状況を見ればあの危機とは一体何であったのかという思いに捉われる。しかし、世界銀行ですら東アジアの奇跡と呼んだ繁栄が、突然の通貨下落とそれに続く金融システムの崩壊により国民が路頭に迷う状況に陥った事実の教訓をけっして風化させてはならない。

この10年、中国の爆発的な経済発展もあったが、東アジア諸国は再び高い成長を取り戻した。危機の際に原因の一つと云われた経常収支の赤字も黒字基調に転換している。また、外貨準備高も飛躍的に増大し、ASEAN主要国のタイ、インドネシア、マレーシアにおいても対外短期債務を十分にカバーする水準に達している。

通貨危機対応への具体的枠組みであるチェンマイイニシアティブも資金融資枠が790億ドルまで拡充され、この10月初めに開かれた日中韓ASEAN蔵相会議では、あらかじめ各国の外貨準備の一部を拠出しておくことに合

意し、危機対応力は更に強化されることが確実となった。一方、地域経済をみれば、東アジアの域内貿易の充足率は55%に達しEUの水準に近づき、域内各国の経済関係はますます結びつきを強めて来ている。中韓は既にASEANとFTAを締結し、日本も遅ればせながらASEANとFTAを締結することで大枠合意に漕着けた。この様な市場主導の経済関係の緊密化は、各国それぞれにこの地域への関心を強め、「東アジア共同体」実現をめぐる動きとなってあらわれてきている。

以上の如く、東アジア諸国は経済的繁栄を取り戻すと共に金融システムリスクを防ぐ体制を強化し、且つ、通貨統合や債券市場の育成等課題を残すが、国際的な危機管理の協力体制を格段に強化して来たと云える。

今後想定されるリスクは何かと問われれば、誰しもサブプライム問題に揺れる米国経済の失速とドル信認の失墜、中国経済のバブル崩壊を挙げるであろう。さらに複雑な金融商品の広がりや想定外の新たな衝撃をもたらすことも考えられる。そうだとした場合、どの様な形となって、地域や一国の経済に打撃を与えることになるか具体的に想像するこ

とは極めて困難である。それ故に国際的な枠組みの更なる進化が求められるが、各国もそれぞれに経済競争力を磨き、危機管理体制を強化すべき責任があることは言うまでもない。タイは80年代の金融危機の経験を97年の危機に生かすことが出来なかったと云われる。そういうことを教訓にして、現在感じる不安を3点指摘しておきたい。

第一に東アジア全般に政治的不安が広がっていることである。

タイではタクシン政権が軍事クーデターによって倒され、その軍事政権も安定しないし、ましてや事実上民政復帰には程遠い。韓国でもノムヒョン政権の下、北朝鮮対話路線もあり国内的に対立が絶えない。台湾も中国の圧力が増すなか、来年の総統選挙をめぐって揺れている。インドネシアも安定しているとは云えないし、ミャンマーは新たな火種である。

日本は云わずもがなだが東アジアと関係の深いオーストラリアでもハワード政権が政権交代の不安に晒されていると云う。政治不安はポピュリズム的政策を助長しやすい。それが危機を拡大する引鉄となる。

第二に各国の金融システムリスクに対する体制は実際に有効に機能するかである。

危機に陥った各国では、財務省や中央銀行から独立した金融規制当局―預金保険機構、不良債権買取機関、の設置や金融機関のモニ

タリングシステム等、概ね整備されて来た。しかし適確な金融改革の下で金融システムリスクに対する体制が機能するには中央銀行や当局の能力に係っていると云って良い。市場のモニタリング、対話を通じて経済の実態についての認識を市場や国民と共有する努力を続けられるか、又それだけの人材が育成されているかが問題である。FRBのバーナンキ議長や日銀の福井総裁が苦闘を続けても報われぬ世界であることも忘れてならない。

第三は銀行の問題である。

発展途上国にとって、いや先進国の日本や韓国においてさえ経済における銀行の影響力は未だ極めて大きい。

アジア危機はある意味で銀行が招いたものと云っても過言ではない。銀行は短期資本の受入窓口となり、貸出競争に陥り、結果としてデレションミスマッチを容認して不良債権の山を作った。1997年以前の時点で既に不良債権比率が高水準に達していたことを忘れてはいけない。

銀行は当局の介入もあり不良債権比率を低下させ、健全性を取り戻したが、その一方で、教訓を生かしリスクマネジメント能力の改善に傾注してきたのか疑問と云わざるを得ない。本年よりBISの新しい規制バーゼルⅡが施行されているが、邦銀を含めて先進的手法を採用している銀行は東アジアにほとんどないのではないのか。このことは邦銀を含め東

アジアの銀行がリスク管理技術において欧米の銀行に劣後することを示すもので残念と云わざるを得ない。

更には新しいビジネスモデルを確立出来ないでいることも不安である。危機処理を通じて各国の銀行は大幅に再編集約されるとともに規模も拡大し、又、外資にも門戸を開放した。

そして、新しい競争やビジネスモデルが生まれることを期待されたが、結果としてはその期待は果されているとは云えない。各国に共通することであるがそこで起きていることは、貸出が伸びず恒常的に預金超過となっていること、主戦場が個人を中心としたリテー

ル分野に集中していることである。市場の期待する姿とは未だキャップがある。日本も同様で、有力邦銀でさえ、フラストレーションを感じる状況が続いていると思われるが、東アジア共同体実現までのシナリオまで語られる現実を考えれば、いずれ東アジア地域における銀行の国際的な再編が起きてもおかしくない。

いずれにせよ銀行はいずれ国際的に評価されるリスクマネジメントや新しいビジネスモデルの構築を迫られることになるだろう。そうでなければ危機を教訓としたことにはなり得ない。